

蒲

池松 孝子

鳥取県白兔海岸の白兔神社を訪ねたことがある。その入口に唱歌「大黒様」の作曲者田村虎蔵の石碑があった。

因幡の白うさぎの神話は「しろうさぎ」として戦前は国語読本に取り上げられていた。その後、平成二十三年からは小学校二年生の国語の教科書に登場している。『古事記』に出てくる「大國主の国づくり」だ。なぜ八十人もの兄弟神をさしおいて大國主が国を持つに至ったかを説明する神話である。皮をむかれてあかはだかのうさぎをあわれがった「大黒様」はきれいな水で身を洗い、蒲の穂綿にくるまれと教えた。石碑の横には蒲が植えられていた。

蒲は水底に根を張って茎や葉の一部を水上に突き出して群生する。十代の頃、お花の稽古に蒲の穂を使ったことを思い出す。きりたんぼやフランクフルトを茎に突き刺したようなものに見えなかった。蒲鋒の語源もかつては、今のちくわのように細い竹にすり身を巻きつけたものだったことからだ。鰻の蒲焼も、かつては開かないで筒切りにして食していたためそれが蒲の穂に似ていたことによるという。

秋の日、蒲の穂はそろそろ白い綿毛を飛ばしているかなと思ひ、公園の人工池に向かった。それほど大きくない水場だが数十本の蒲の穂は例年通りだった。一本、二本とわずかに開いた穂先から、蒲公英の綿毛たんぼぼのように秋の光の中をふんわりふんわりと飛んでいた。風媒花の所以だ。蒲の穂には花びらはない。穂の茶褐色に膨らんでいる部分が雌花、穂の上に突き出た細い棒のようなものが雄花だ。晩秋に熟すと種子をつけた穂綿が飛ぶ。

秋風に羽ある種となりにつけり

佐藤 正夫

昔から若葉は食用に、花粉は傷薬、茎や葉はむしろやごごの材料に使われた。雄花が熟したものを着火材に、乾燥させて蚊取り線香にしたといわれる。布団も以前は蒲団と書いていたがこれも蒲の穂を使って繊維状のスポンジのようなものを編んで敷物にしていたことによる。地下茎はてんぷらが美味しいと聞く。